



Title	近世前半期版本医学書における引用・卓立を示す補助 符号について
Author(s)	藤本, 能史
Citation	語文. 2020, 115, p. 49-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88511
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世前半期版本医学書における引用・卓立を示す 補助符号について

藤 本 能 史

一 はじめに

補助符号は、文章をより読みやすく、また文意が伝わりやすくするために用いられる文字以外の記号の総称である。文や語句の切れ目の明示、文章の引用あるいは特殊な語句の卓立など、用途ごとに様々な符号が用いられる。

このうち、引用・卓立の場合は、傍線・括弧などの符号が使われている。ここに言う引用・卓立とは、漢字仮名交じり文における分節から、いわゆる強調に至るまでの広い範囲を指すものであるが、引用・卓立を補助符号によって示すことは、版本において近世後期頃から見られるようになり、近代に至り大きな発展を遂げたことが、先行研究で指摘されている。大熊(一九九五)は、特殊な単語の卓立の役割を果たす鉤括弧の早い例として、建部清庵・杉田玄白『和蘭医事問答』(一七九五)を挙げている^①。しかし、近世前半期において、引用・卓立を示す場合にどのような表記形

式をとっていたかについては、ほとんど言及されてこなかった。近現代に至るまでの通時的変遷を考える場合、近世における実態を検討し、傍線・括弧などの符号が使われるようになる要因を示す必要があると考えられる。そこで本稿では、版本の医学書を資料とし、近世前半期(本稿では、『和蘭医事問答』より前である慶長元年(一五九六)～天明九年(一七八九)の期間)における引用・卓立を示す補助符号の実態を調査し、その様相を明らかにする。

近世期は、商業出版が勃興・隆盛した時期であり、大量生産が可能になったことで読者層が大きく拡大した。写本の場合、一冊一冊の製作に莫大な労力を要したため、書記行為における効率性が重視されたが、版本の場合、一度版木を作れば大量生産が可能になり、製作者と読者との距離が遠くなるため、書記において読者への配慮が必要となった。そのため、製作者にとつての書記効^②率より、読者にとつての読みやすさが重視されるようになった。

即ち、近世期は国語文字・表記の形式が、書きやすさ重視から読みやすさ重視へと転換した時期であると捉えることが出来る。また版本に印刷されるものは、写本や刊本に書かれる朱引とは違って、個人的な手控えではなく、そこに補助符号が印刷されるということは、読み手に対して、文字以外にそれらがある方がよいと考えたとみることが出来る。本稿で版本を対象として調査を行うのは、そのようなことによるのである。

二 先行研究

二・一 引用・卓立を示す補助符号に関する先行研究
引用・卓立を示す補助符号のうち、鉤括弧に関しては、その成立及び展開について先行研究で言及されているため、以下、確認する。

大熊（一九九五）は、現代ではともに鉤括弧と呼ばれるものの中に、二種類の別があることを認めている。外来語などの特殊な単語を括る場合や、引用・参照に用いられるものは一八世紀頃から現代の鉤括弧に近い形状のものが見られる。一方で、会話文に用いられる鉤括弧は、開き括弧が庵点（へ）を起源として成立し、閉じ括弧は、漢文訓読において主に段落を区切る目的で使用されていた鉤画（一）が起源であると推測し、開き括弧より遅れて成立したものであると指摘している。

矢田（一九九八）は、大熊氏の指摘に更に補足を加えている。引用を示す場合にも、その開始に庵点を使用した例があることを示

し、「引用文の表示にあたって、近世期においては現代の鉤括弧に近いものと、開きが庵点で閉じが現代の鉤括弧に近いものとの二通りが行われていたのであって、庵点と鉤括弧の関係の問題は何も会話符の場合にのみ認められるわけではないのである」（五二二頁）とし、「会話符としての鉤括弧の問題は、記号そのものの成立とは切り離して考えられるべきで、あくまで引用符として出された鉤括弧の用途拡大の歴史として捉えられるべきである」（五二二頁）と指摘している。

近代に入ると、引用符・会話符共に同形の鉤括弧が使用されるようになるが、近代における鉤括弧の用法として注目すべき点として、外来語を括る符号として広く使用されるようになった点が挙げられる。深澤（二〇〇四）は、総合雑誌『太陽』の前誌群を資料として、片仮名表記外来語の特質について、補助符号（鉤括弧・傍線）と表記体に視座を置いて考察を行っている。深澤氏は、表記体と文字列との関係を整理するために、卓立表記・非卓立表記の別を立てた。以下の（c）（d）を卓立表記、（a）（b）を非卓立表記としている。

- （9）（a）漢字で表記する。
- （b）表記体を構成する仮名と同じ仮名で表記する。
- （c）表記体を構成する仮名と異なる仮名で表記する。
- （d）符号を付す。

卓立表記・非卓立表記という観点から平仮名表記外来語と片仮名表記外来語との違いを考察した結果は以下の通りである。

(19) 外来語平仮名文字列は、文字列単独で卓立表記にも非卓立表記にもなる。

(20) 外来語片仮名文字列は、卓立表記されるのが基本である。文字列単独ではなく、符号が併用される。 四四頁

片仮名表記外来語は、符号を使用することで卓立表記としての機能を全うすることを指摘している。また、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じり文への表記体の推移と、外来語の符号の有無の推移と相関関係にあることも示している。

深澤(二〇〇六)では、総合雑誌『太陽』における片仮名表記外来語について、前誌群との比較を行っており、『太陽』及び前誌群に現れる外来語を、地名・人名、それ以外の名詞にわけて、それぞれの補助符号(鉤括弧・傍線)の有無を調査している。地名・人名は傍線のみが語数増大に伴った量的規模拡大を果たしている。対してその他の名詞は、鉤括弧の量的拡大により、相対的に傍線の量的規模が縮小していく。つまり、地名・人名には傍線が、その他の名詞には鉤括弧が使用されるといった、截然とした使い分けがなされるようになったと指摘している。また、補助符号の使用は徐々に減少していくが、その要因の一つとして、深澤(二〇〇四)でも挙げられた、漢字片仮名交じり文から漢字平仮名交じ

り文への移行を挙げている。片仮名交じり文において、片仮名表記の外来語を「てにをは」等と区別するために符号が使用された。しかし、平仮名交じり文に移行し、文字列単独で区別が可能になったことで、符号を付す必要性が希薄化したため、符号が衰退したと指摘している。

鉤括弧の成立及び展開については近世後期から近代以降にかけて言及がなされているが、それ以前の補助符号の使用実態についてはほとんど言及されていない。引用・卓立を示すために、鉤括弧が使用されるようになった原因を探るには、それ以前の表記形態を調査し、補助符号を付す契機となった文字・表記上の変化を調査する必要があると考えられる。また、引用・卓立を示すための補助符号は、傍線・傍点・括弧など様々あるが、鉤括弧以外の符号については、ほとんど研究がなされていないのが現状である。深澤氏は近代の資料を対象として、鉤括弧・傍線の二種類の符号の使用実態を調査し、具体的な使い分けについて明示しているが、近世期においても同様に、鉤括弧以外も含めた種々の補助符号の使用実態を調査する必要があると考えられる。

二・二 表記体毎の分節方式に関する先行研究

漢文体と漢字仮名交じり文とで、語句の分節方式が異なっていることも確認しておく。まず漢文体においては、訓読の際に様々な符号が使用されているが、そのうち、語句の纏まりを示す目的で使用される符号は合符である。合符について、小林(一九七九)

は、「合符」というのは、漢文訓讀における符號の一種であつて、漢字二字又は三字以上の連結が一纏まりであることを示す働きを持つてゐるもの」(二二六頁)であり、「本來の漢字二字又は三字以上の連結が一纏まりであることを示す機能は鎌倉時代以降も固定した用法が引續き行われている」(一四二頁)と指摘している。

合符は、漢字二字以上の纏まりを示す符号であり、漢字文字列の中で特定の単語を分節する効果があつたと考えられる。小林(一九七九)は、平安・鎌倉期の訓点資料を調査対象とした研究であるが、鎌倉時代以降も、同様の機能で合符は使用される。近世頃から版本に刻されるようになるが、それは傍線が刻されるようになる時期よりも早い。

一方、漢字仮名交じり文の場合、「漢字+仮名」という文字配列に分節効果があることが指摘されている。矢田(二〇一二)によると、商業出版の勃興に伴い、読み手にとって可読性の高い表記形式が求められるようになり、その結果選択されたのが漢字仮名交じり文であつた。矢田氏は、漢字・平仮名併用表記の表記機能の効果について、以下の二点を挙げている。

I、分節効果……平仮名―漢字の並びによって、その間に意味上の切れ目を示すことが出来る効果。

II、表意効果……表記対象の語の意味を示す効果。それには同音異義語の中からの一語の同定が可能となることを含む。

用言については、語幹の漢字表記によって語の同定と語義表示を行うと共に、活用語尾の仮名表記によって文法的機能をも併せて示すことができる。
五六六―五六七頁

この両機能によって、漢字仮名交じり文は可読性が高まつてゐると指摘している。漢字の連結が、合符なしでも一纏まりであることを示す点で、漢文体とは異なっている。

先行研究より、表記体によって、可読性を高めるための語句の分節方式が異なつてゐることが分かる。引用・卓立を示す補助符号の使用にも影響を及ぼす可能性は十分にあると考えられるため、表記体毎に分けて考察を行う必要があるだろう。

三 調査方法について

大熊氏は、特殊な単語を括る鉤括弧の早い例として、『和蘭医事問答』(二七九五)の例を挙げている。そのため、使用に至る経緯を明らかにするために、『和蘭医事問答』より前の医学書を調査する必要があると考えられる。医学書(特に蘭方医学書)には外来語が多く使用されているため、調査対象として適当である。そこで本稿では、近世前半期(慶長元年(一五九六)―天明九年(一七八九))の版本の医学書を対象に調査を行う。専門家向けの資料だけでなく、通俗医学書も対象とする。また当時の医学書は、大きく漢方・蘭方の二種に分類されるため、それぞれに対して分析を行う。なお調査において、近世期の医学書が多数所蔵されてい

る、京都大学富士川文庫の資料を扱った。

四 近世前半期医学書における補助符号の使用実態

四・一 漢方医学書における使用実態

まず、漢方医学書における補助符号の使用実態について分析を行う。本調査において、符号の使用が確認できた資料は、全四一七点であった。うち、漢文体の資料が三〇四点、漢字片仮名交じり文の資料が八五点、漢字平仮名交じり文の資料が二八点である。調査した資料のデータは膨大であるため、紙幅の都合上^④掲載の形式を採ることを、ご了承願いたい。^⑤以下、表記形式ごとに調査結果を概観する。

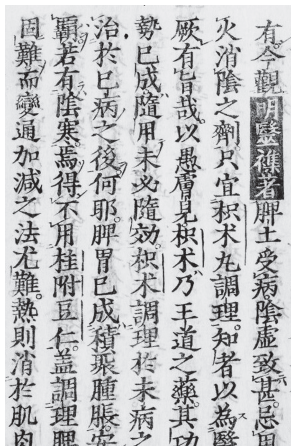
四・一・一 漢文体

まず、漢文体の資料について分析を行う。漢文体の資料において最も多く使用されていた符号は、合符であった。

先行研究で触れた通り、合符は引用・卓立の機能を有しているわけではないが、合符を用いることで語句の纏まりが分かるため、他の記号を用いることなく、当時の読者は読解することが可能だったのである。また今回調査した資料は大半が大型本であったが、長友（二〇一〇）によると、大型本の漢字漢文体の医学書は、上層専門家向けであると指摘されており、医学用語など特殊な語句であっても、纏まりさえ分かれば、他の符号を使用せずとも理解できたのだと考えられる。

このような中で、傍線・傍点などの符号を用いて文や語句の強調を行っている資料もいくつか確認できたが、これらの大半は、和刻本漢籍であった。例えば、（明）呉球撰『諸証弁疑』（二六四五、田原仁左衛門刊）では、「枳朮」「八味順氣」「續命煮散」など、生薬名の右側に単線が引かれている。（図一）

図一 『諸証弁疑』（二六四五）^⑥ 5丁表



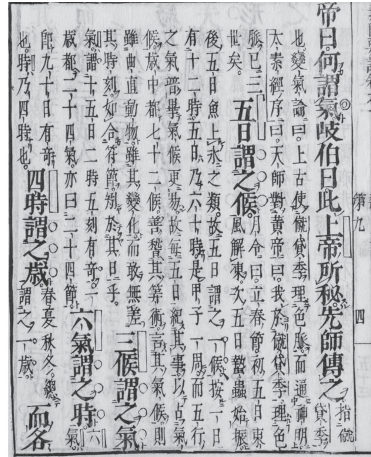
原刻本を確認できていないため、原刻本からそのまま流用したかどうかは判断し難い。しかし、漢籍で使用されていた補助符号を、本邦においても流用した可能性は十分に考えられる。^⑧

著者ごとに使用状況を確認すると、補助符号の使用は、著者によってその傾向が分かれることが確認できた。特に、竹中通庵（敬・岐山）の著作においては、様々な符号が使用されていることが分かる。

之眠ルヲ覺ス。又姓名戴籍ヲ圍ムヲ有。混シテ之ヲ視ルヲ莫レ。

『黄帝内経素問要語』(一七〇六?)⁽¹⁾ 序目・29丁表・裏

図3 『黄帝内経素問要語』(一七〇六?)⁽²⁾ 卷1・25丁裏



まず『古今養性録』の凡例を確認すると、資料中の重要な語句及び文には批点(・)・圈点(○)を付し、より重要な箇所には重圈(◎)などを付している。また、長文の引用の場合には鉤括弧(「」)付し、より重要な文の場合には二重鉤括弧(『』)を付している。また、凡例には詳しく示されていないが、地名・人名や医学用語などの、特殊な単語には、単線・複線を付している。

『黄帝内経素問要語』の凡例を確認すると、まず経釈に批圈を付すとある。符号は「・」「○」が使用されている。また経釈の「緊

關」なものについては、重圈を付すとある。この「緊關」という語について『漢語大詞典』を参照すると、「最緊要的」とあり、「最も重要」という意味である。つまり、引用されている経釈の中で、最も重要な箇所に重圈を付しているのである。経釈が数十字に及ぶ場合、「劈」を上下に加え、特にその内容を称賛する場合は双鉤、即ち二重鉤括弧を付している。「劈」は本文との対照より、鉤括弧を指しているとみられる。また、地名・人名の後に単線を、官爵・品物の名などは語句の前に単線を置くところがあるが、図3を参照する限り、地名・人名(図3では「飢貧季」)は右側に単線を、他の語句(図3では「太素經序」)は左側に単線を付していることが分かる。語句や表現が劣っていることを指摘する場合、「鉄柱ヲ負シテ尚ヲ標白ニス」とあるが、これは図3の「上帝」、「五日」などの右側に付されている白抜きのような符号を指していると思われる。

以上、『古今養性録』『黄帝内経素問要語』の凡例を確認した結果、通庵は、重要な語句及び短めの文に批点・圈点を、長文の場合は鉤括弧を使用しており、より重要な場合は重圈、二重鉤括弧を使用していることが分かった。また、地名・人名及び特殊な語句については、傍線を付しているが、付す目的や語句の種類に応じて、左右重複使い分けを行っていた。なお、通庵以外の著者の資料においても、各符号は概ねこの通りの役割で使用されていた。通庵は、『古今養性録』の凡例において、多様な符号を用いる目的を、「先哲ノ例ニ準シテ。見易キコトヲ欲スルノミ。」と記して

いる。つまり、読者にとって読みやすくするために、様々な符号を使用したのである。

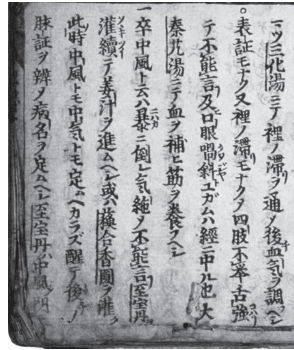
ここで問題となるのは、「先哲ノ例」というのが何を指しているのか、即ち、通庵が多様な補助符号を使用する要因となった資料はどのようなものか、ということである。『古今養性録』の「引用諸家目」には五五四部の文献が明記されており、その大半は漢籍である。通庵は、『古今養性録』を著す上で膨大な漢籍を渉猟したことが窺える。しかし、参照した漢籍が原刻本であるか和刻本であるかは判断し難いため、原刻本・和刻本いずれの表記に拠ったかは不明である。ただ今回の調査では、通庵以前に鉤括弧・傍点を使用して資料が確認できなかったため、原刻本に拠ったという可能性は否定できないであろう。また、写本での補助符号や版本への書き込みとしての補助符号を、『古今養性録』の出版に際し、版に刻するに至ったという可能性も考えられる。ここは未調査であるため、今後の課題としたい。

四・一・二 漢字片仮名交じり文

漢字片仮名交じり文の資料において最も多く使用されていた符号は、句読点であった。ただし、現在のように「、」「。」が区別されていたわけではなく、同一の符号が、句点相当・読点相当の両方の位置に使用され、資料によっていずれかが使われるというものであった¹³⁾。その役割は、引用・卓立ではなく、文の切れ目を表すものである。

引用・卓立を示す符号を使用した早い例として、曲直瀬玄朔『惠徳方』（一六三三）が挙げられる（図4）。

図4 『惠徳方』（一六三三）¹⁵⁾ 3丁表



『諸証弁疑』同様、「三化湯」「至宝丹」などの生薬名に単線が付されている。『惠徳方』の出版意図について、遠藤・中村（二〇〇四）は以下のように述べている（傍線は引用者による）。

玄朔が常陸国に配流された折に『伝心方法』（『惠徳方』）を著した意図を以下に示す書状の中に見出すことができる。これは慶長元年六月、玄朔が北村宗童に宛てたものである。

「尚々、旧冬以来医書一冊書立申候、当流之書物余数多にて、療治候時いづれも見申候者すミ可申とも難弁候間、不斷薬箱二入、療治候時只一冊見申、すミ申様二仕、玄鑑二附属

候、今度之牢人之徳と存候、誠塞翁か馬にて候、今度之牢人ハ、拙者医道今一代も可相統故かと、天道難有存候、其書物懸御目度候、但余近道ニ專過候て、人二見すへき物ニあらず候、家の重宝ニ候、但おかしく可被思召候、拙者心にハ随分と存候、以上」〔慶長元年〕六月一三日〕

この書状から、玄朔は常陸国の配流をきっかけに自分流の医方書を著そうと思ひ立つたことが理解される。初代道三の医書は余りに多いため、治療の時にどの本を見ればよいか判断し難い。そこで、自分は、不断薬箱に入れておけて治療の折にはその一冊を見れば済むような平易でコンパクトな医方書〔伝心方法〕を書き上げた。

五五八―五五九頁

玄朔の書状の内容から、『惠徳方』は、平易でコンパクトな医書を目指して書かれたものであることが窺える。そのため、線を付すことで、線が引かれた語句は生薬名を表しているのだと読者に理解してもらえように配慮したのではないだろうか。ただし、『惠徳方』と同年に出版された『日用食性』など、玄朔の他の著作においては傍線などの符号は付されておらず、玄朔が傍線の使用を徹底していたわけではないことが分かる。ただ、他に傍線を使用していた資料が、初学者向けの資料である岡本一抱『医学講談発端弁』（二七〇〇）などであることを踏まえると、初学者及び一般向けの平易な資料において、補助符号が使用される傾向にあると考えられよう。

四・一・三 漢字平仮名交じり文

漢字平仮名交じり文の資料においては、句読点と合符以外の符号の使用は確認できなかった。資料の内容を確認すると、専門書というよりは、より通俗的で、且つ内容自体がより平易なものがほとんどである。

矢田（二〇一二）で指摘されているとおり、漢字平仮名交じり文は、読者にとって非常に読みやすい（文意が理解しやすい）表記形式であった。且つ、内容の平易さも相俟って、句読点によって文の切れ目が分かれば、文意が理解できたのだろう。また、漢字平仮名交じり文の読みやすさは、仮名書きされる自立語の有無によって変化すると考えられるが、漢字平仮名交じり文の医学書において、仮名書きの自立語（特に専門用語）はほとんど見られなかった。そのため、傍線・括弧などの符号を使う必要がなかったのだと考えられる。

以上、表記形式毎に分けて調査結果を概観した。近世前半期においては、合符や句読点など、語の纏まりや、文の切れ目を示す符号は、多くの資料において使用されていたが、引用・卓立を示す補助符号はごく一部の資料においてしか使用されておらず、漢字平仮名交じり文においては使用が確認できなかった。その中で竹中通庵は多様な符号を使用しており、且つ使用に際して凡例で役割を明示していることは注目値する。通庵以外の著者の資料においても、各符号は通庵が凡例で示した役割で概ね使用されて

【表2】 蘭学関連の医学書に使用された補助符号一覧

書名	著者	表記体	出版年	補助符号	その他	レコードID
解体新書 4巻附序図1巻	杉田玄白(翼)	漢文体	1774(安永3年)	句読点・合符	外来語漢字表記、句読点は「。」のみ	RB00001510
六物新志 2巻	大槻玄沢(茂質) 譚考・杉田勤校訂	漢文体	1786(天明6年)	右単線・合符	外来語漢字表記、外来語に右単線	RB00000758
阿蘭陀外科指南 5巻	不明	漢字片仮名交じり文	1705(宝永2年)	句読点	外来語片仮名表記、句読点は「。」のみ	RB00001374
外科訓蒙図彙 2巻	伊良子光顯鑑定	漢字片仮名交じり文	1769(明和6年)	右単線	外来語漢字・片仮名表記、薬品名に右単線	RB00002225
蘭学階梯 2巻	大槻玄沢(茂質)	漢字片仮名交じり文	1788(天明8年)	鉤括弧	外来語漢字・片仮名表記、片仮名表記外来語に鉤括弧	RB00005699

いた。著者によって使用傾向が異なるが、概ね読者にとって読解しやすくする目的で符号が使用されていると考えられる。

四・二 蘭方医学書における補助符号の使用実態

次に、蘭方医学書における補助符号の使用実態について分析を行う。調査した資料は全五点であり、いずれも符号の使用が確認できた。データは【表2】の通りである。まず漢文体資料について確認すると、杉田玄白『解体新書』（一七七四）では、音訳された外来語に合符を付すことで、語句の纏まりを示している。

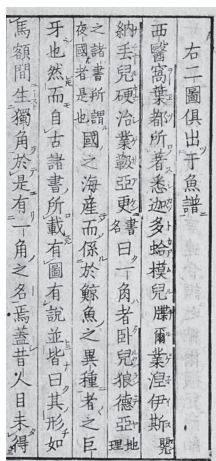
大槻玄沢『六物新志』（一七八六）は、漢文体において、音訳された外来語が使用されている（図5）。音訳された外来語に傍線が付されていることが分かる。傍線を付

す基準について、凡例で以下のように述べられている（原文は漢文。句読点は筆者による）。

一諸々ノ地名其ノ漢譯有ル者ハ、皆之從フ。其ノ間訛轉有ル者モ亦タ其ノ舊ヲ革メズ。若シ之レ無ケレハ、則チ今新タニ對譯ノ法ヲ以テ其ノ呼稱ニ當テ、而シテ填ムルニ漢ノ字音ヲ以テス。且ツ旁書副墨スル者ハ、以テ誦讀ニ便スルナリ。

『六物新志』（一七八六）巻1・13丁裏

図5 『六物新志』（一七八六）¹⁶ 巻1・18丁表



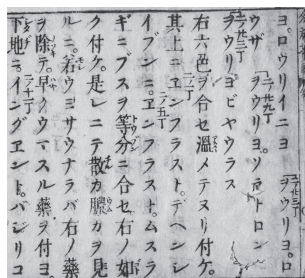
外来語を示している文字列の右側にルビを振り、且つ傍線を付すことで、読みやすくしているのである。

次に、漢字片仮名交じり文資料について確認すると、『阿蘭陀外科指南』（一七〇五）は、漢字片仮名交じり文において、外来語は片仮名表記で書かれている（次頁の図6）。

図6より、文や語句の切れ目を「。」で区切っており、助詞「ヲ」

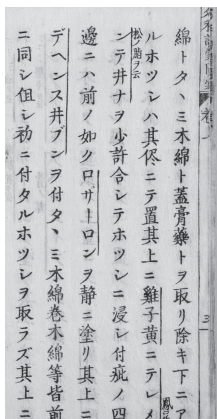
に続く場合は「。」を付していないことが分かる。

図6 『阿蘭陀外科指南』（二七〇五） 4丁裏



また、『外科訓蒙図彙』（一七六九）は、薬品名を表す外来語の右側に傍線が付されている（図7）。

図7 『外科訓蒙図彙』（一七六九） 6丁裏



管見の限り、片仮名・漢字表記に関わらず、本邦版本では初めて外来語に符号を付している例である（明和六年、皇都書肆林宗兵衛の刊記あり）。また、本居宣長『漢字三音考』（一七八五）など、国語学関連の資料においても仮名表記の語句に傍線が付される例が確認出来るが、それよりも早い。すなわち、仮名表記の語句に傍線が付された早い例でもあるとみられる。

図7より、片仮名表記だけでなく、漢字表記の薬名にも傍線が付されていることが分かる。傍線を付す基準について、凡例で以下のように述べられている。

此書國字ヲ以テ記ス故ニ藥品錯雜シテ分別シ難シ依テ薬名毎ニ一ヲ加テ覽者ニ示ス

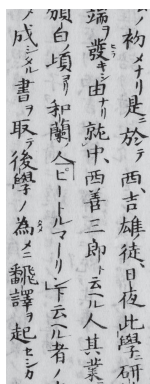
『外科訓蒙図彙』（一七六九） 卷1・2丁裏

薬名を漢字及び片仮名で記しているため、地の文との混同を防ぐために傍線を付していることが分かる。

外来語に鉤括弧が付された資料のうち、『和蘭医事問答』とほぼ同時期のものとしては、大槻玄沢『蘭学階梯』（一七八八）が挙げられる（次頁の図8）。

図より、オランダ人「ピートルマリーン」に鉤括弧が付されていることが分かる。人名・地名以外の語においても一様に鉤括弧が付されている。符号を付す基準について、凡例で以下のように述べられている。

図8 『蘭学階梯』（二七八八）¹⁹ 巻1・23丁裏



一音釋ヲ為スニ片假名ノ字ヲ合セテ記セシハ一字ニテハ彼ノ語音ニ協和シ難キカ故ナリ譬ヘハ シエス ウエ キユエ ヒユ等ノ如シ又促呼スル音ハ字ノ右足ニツ字ヲ接ス譬ヘハ テレツキ レットルト云カ如シ又上ヨリ直下ニ引ク音ニハ一ヲ記ス乃チ ヘーメル アールド 等ノ如シ且蘭語片假名ニテ記スルモノ上下混同セサルヤウニ「」ノ勾畫ヲ設ク

『蘭学階梯』（二七八八）巻1・14丁裏～15丁表

漢字片仮名交じり文において、片仮名表記外来語と、地の文が混同するのを防ぐために、鉤括弧を使用しているのである。

大熊（一九九五）で指摘されている、『和蘭医事問答』の鉤括弧も、同様の役割であることが以下に示す凡例の記述から分かる。

一和蘭語上下ニ混同セン事ヲ恐ル故ニ「」如此ノ勾畫ヲ設ク

『和蘭医事問答』（一七九五）巻1・9丁裏

『外科訓蒙図彙』や『六物新志』では、外来語に傍線を付すのに

対し、『蘭学階梯』や『和蘭医事問答』では鉤括弧を付している。両者の凡例を見たら分かるように、鉤括弧ではなく「勾畫（鉤画）」という語が用いられている。鉤画は、漢文訓読に使用される符号であり、『倭讀要領』において、次のように説明されている。

○段落ヲ分ルニハ、鉤畫ヲ用フ。章首ニハ「ヲ用ヒ、結末ニハ」ヲ用テ、前後ヲ隔斷ス。皆是ヲ鉤畫トイフ

『倭讀要領』巻下（一七二八）3丁表

鉤画は、漢文において段落を区切る目印として使用されていたことが分かる。この鉤画の機能を応用し、漢字片仮名交じり文において片仮名表記された外来語を区切る目的で、医学書においても使用したのだと考えられる。『蘭学階梯』『和蘭医事問答』以降、表記体に関係なく、外来語の卓立に鉤括弧が伝統的に使用されるようになったと予想されるが、近世後期の用例も確認する必要がある。この点については今後の課題としたい。

五 おわりに

本稿では、近世前半期医学書における強調・引用を示す補助符号の使用実態について調査を行った。まず、漢方医学書においては、合符や句読点など、語の纏まりや文の切れ目を示す補助符号は多くの資料で使用されていたが、引用・卓立を示す補助符号は和刻本漢籍など、ごく一部の資料に限られていることを指摘した。

中には、竹中通庵のように多様な補助符号を駆使し、重要箇所を読者に明示するような例も確認でき、著者によって傾向が異なるが、概ね読者にとって読解を平易にする目的で符号が使用されていることを明らかにした。漢字平仮名交じり文においては、資料内容が平易であること、及び矢田氏が指摘する漢字平仮名交じり文が有する分節機能により、句読点以外の符号が使用されなかったことを指摘した。

蘭方医学書においては、『蘭学階梯』『和蘭医事問答』以降、表記体に関係なく、外来語の卓立に鉤括弧が伝統的に使用されるようになったと予想されるが、近世後期における使用実態を整理し、本稿で示した内容との連続性がみられるかを確認する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

- (1) 大熊氏は、『和蘭医事問答』の成立年を一七七三年としているが、これは清庵と玄白が書簡のやりとりを行った年であり、刊記を確認すると(筆者が確認出来たのは、富士川文庫本・東京大学総合図書館蔵本)、出版年は寛政七年(一七九五)であった。本稿においては、出版された一七九五年が、意味のある年である。
- (2) W・J・オング氏は、『声の文化と文字の文化』において、「手書き本の文化は、『本の』生産者指向 producer-oriented である。なぜなら、ある作品の写本の一冊一冊には、筆写する一個人の時間の莫大な消費がこめられているのだから。中世の手書き本は、略号で満ちている。そうした略号は、読者には不都合でも、筆写する者には好都合なものである。〔それに対し〕印刷は、『本の』消費者指向

consumer-oriented である。なぜなら、ある作品の版本の一冊一冊には、『手書き本に比べ』はるかに少ない時間の投資しかこめられていないのだから」(二五二頁)と述べており、手書き本は書き手重視、版本は読み手重視で製作されていることが指摘されている。

- (3) 『日本大家論集』(明治二〇年～二七年)、『日本之法律』(明治二一年～二七年)、『日本商業雑誌』(明治二三年～二七年)、『日本農業雑誌』(明治二四年～二七年)、『婦女雑誌』(明治二五年～二七年)の五誌。

- (4) 序跋・凡例と本文とで表記体が異なる資料があるが、本稿では本文の表記体によって分類を行う。また、今回調査した漢方医学書の総資料数は、五〇一点である。内訳は、漢文体三二点、漢字片仮名交じり文二〇点、漢字平仮名交じり文五七点である。

- (5) 漢方医学書の調査データは、以下の web ページに掲載した。
短縮 URL: <http://u0ulnev/WkP9>

元 URL: [https://www.dropbox.com/s/71aq1f935pyqhr/藤本\(2020\)](https://www.dropbox.com/s/71aq1f935pyqhr/藤本(2020)調査資料一覧.xlsx)

調査資料一覧.xlsx

- (6) レコード ID: RB00003342

- (7) 本稿に言う「原刻本」は、初刻本に限らず、和刻本の元版である中国で刊行された本を指す。

- (8) 筆者は、徐鳳(一六〇二)『鍼灸大全』(『臨床鍼灸古典全書第39巻』収録)や、艾儒略(一六二六)『西學凡』(呉主編(一九六五)収録)など、中国の版本においても傍線・傍点など補助符号が使用されている資料を確認している。本稿が対象としている医学書と刻本の原刻本においても、補助符号が使用されていた可能性は十分にあるだろう。

- (9) 竹中通庵の略歴は、関根(一九九〇)、中村(一九八七)を参照し私に纏めた。

- (10) レコード ID: RB00002508

(11) 『黄帝内经素問要語』は、富士川文庫においては出版年が明記されていなかったが、蓬左文庫・狩野文庫所蔵本は、宝永三年（一七〇六）刊とあるため、とりあえず一七〇六年と記しておく。

(12) レコードID: RB00002413

(13) 師の半井瑞堅が、『古今養性録』の凡例にいう「先哲」の一人である可能性があるが、瑞堅の著作は、版本では残っていない。

(14) 飛田（一九七四）によると、『倭讀要領』において「、／」の使い分けについて言及されているが、実際に使い分けが行われたのは、早いもので幕末あたりである。したがって、本稿の調査範囲において使い分けがみられないことと齟齬しない。

(15) レコードID: RB00000561

(16) レコードID: RB00000758

(17) レコードID: RB00001374

(18) レコードID: RB00002225

(19) レコードID: RB00005699

参考文献

遠藤次郎・中村輝子（二〇〇四）「曲直瀬玄朔の著作の諸問題―『山居四要抜粹』『済民記』は玄朔の著作か』『日本医史学雑誌』第五〇巻

第四号、思文閣出版

大熊智子（一九九五）「引用符を用いた会話文表記の成立」『日本文学』

八四、東京女子大学日本文学研究会編

呉相湘主編（一九六五）『中國史學叢書23』、臺灣學生書局

小林芳規（一九七九）「訓點における合符の變遷」『訓点語と訓点資料』

六二輯、訓点語学会

関根透（一九九〇）「竹中通庵の医の倫理観（1）―『疾病両鑑』より

―」『鶴見大学紀要第四部 人文・社会・自然科学篇』二七、鶴見大学

東北大学附属図書館編（一九九四）『狩野文庫目録和書之部』第九門、丸善株式会社

長友千代治（二〇一〇）「日本近世における出版と読書―読者層の拡大と出版の推移―」『識字と読書 リテラシーの比較社会史』昭和堂

中村璋八（一九八七）『古今養性録』について『外国語部論集』二六、駒澤大学外国語部編

名古屋蓬左文庫編（一九七五）『名古屋蓬左文庫漢籍分類目録』、名古屋市教育局教育委員会

飛田良文（一九七四）「句読表示の成立過程―明治初年から『句読法案』まで―」『言語生活』二七七、筑摩書房（飛田良文（一九九二）『東京語成立史の研究』に再録）

深澤愛（二〇〇四）「外来語の片仮名表記と表記体―『太陽』前誌群による考察―」『語文』八三、大阪大学国語国文学会編

深澤愛（二〇〇六）「近代における外来語片仮名字列の特質変化―『太陽』及び『太陽』前誌群を資料として―」『国語文字史の研究』

九、和泉書院

矢田勉（一九九八）「印刷時代における国語書記史の原理」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院（矢田勉（二〇一

二）『国語文字・表記史の研究』に再録）

矢田勉（二〇一〇）「漢字仮名交り文の成立」『国語文字・表記史の研究』汲古書院

羅竹風主編（二〇〇一）『漢語大詞典』第二版、漢語大詞典出版社

『臨床鍼灸古典全書第39巻』（一九九二）、オリエン特出版社

W・J・オング著、桜井直文他訳（一九九二）『声の文化と文字の文化』、藤原書店

参考URL

富士川文庫―京都大学貴重資料デジタルアーカイブ

<https://rmdakulib.kyoto-u.ac.jp/collection/fujikawa>
・『倭讀要領』—国文学研究資料館所蔵
<https://kotensekinijl.ac.jp/biblio/200004506/viewer/>

(ふじもと・よしふみ 本学博士後期課程学生)